



第22回アジア太平洋研究賞  
受賞論文要旨

*22nd Asia Pacific Research Prize  
Dissertation Abstracts*

授賞式 / *Awards Ceremony*

●2023年8月3日(木)●

*Thursday, August 3, 2023*

●淡路夢舞台国際会議場●

*Awaji Yumebutai International Conference Center*

第22回アジア太平洋研究賞受賞者

氏名および論文名	論文の概要	選考理由
<p>こう きか 黄 喜佳</p> <p>現代中国の中央地方関係再考——集権と分権を架橋する広域統治機構の視角から</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; border-radius: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;">本賞</p>	<p>本論文は、中央の下にある省という伝統的な行政区画を超える、複数の省を包摂する広域統治機構に着目した。従来の研究は、こうした機構の存在は、単に集権化と分権化に伴う付随的な結果に過ぎなかったとする。本論文では広域統治機構が統治システムに取り入れられた状況や、その持続的運用の様子について、一貫した原因の分析を試みた。</p> <p>各章の考察によれば、中央は折衷的な政治状況を維持し、効果的な統治システムの運営を確保するために、広域統治機構を通じた統治方針を創出した。現代中国の国家形成期において、厳格な中央集権的な体制ではなく、広域統治機構を通して、制度的に地方を統合しながらその活力も保つことができたのである。</p>	<p>現代中国の中央地方関係の研究は、これまでで中央と省級政府との関係の分析に特化されてきたといつてよい。建国から60年代末まで断続的に設立されていた、複数の省級地方政府にまたがる上位の広域統治機構については、重要な役割を担っていたことは明らかであったにもかかわらず、資料不足の壁に阻まれほとんど研究がなされてこなかった。</p> <p>本論文は、この未開拓の領域に真正面から挑んだ正統派の実証研究である。博士論文としても、各章・全体の構成・論点の選択・論証も過不足なく、使用資料も近年入手可能となった珍しい流出資料や当局の新公開資料を組み合わせ、適切な史料批判を踏まえて活用するなど、現時点で望みうるベストを尽くした高い水準に達している。</p> <p>章ごとに公式見解・通説を切れ味よく分析する明快さに加え、従来は個別に検討されていたイデオロギー、行政、政治、軍事にわたる幅広い論点を手際よく統合され、徐々に各時代の広域統治機構やその指導者が明確な姿を取り始める論述は圧巻で、アジア太平洋研究賞に値する優れた論文と評価できる。</p>
<p>くりっでいこーん うおんさわーんばーにと Kritdikorn Wongswangpanich</p> <p>Sick Kingdom: The Role and Politics of Thai Health Care in the Domination of Bhumibol's Narrative (病める王国—タイ王党派の物語りの政治—)</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; border-radius: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;">佳作</p>	<p>本論文は、タイにおける9世王プーミボンの統治体制を、サリム(salim)と呼ばれる大衆支持基盤の変遷から分析する。第1期は、9世王から弱者への便益の提供を「お父さんから」の慈悲の施しと受け止めて感謝する人物崇拜の原理主義的なサリムである。第2期は、9世王を無我の善人と捉えて、理想像の「お父さんのように」行動すべきと考える教義主義的な進歩派のサリムである。第3期は9世王礼賛を繰り返す、「お父さんのために」非民主的な政権交代への支持もいとわないサリムである。第4期は、9世王の崩御と理想像からほど遠い10世王の即位で、一部のサリムが「お父さんの代替」つまり別のお父さん探しを始める時期である。</p>	<p>これまでほとんど分析されてこなかった現代タイ政治の中の重要な担い手である王党派「サリム」の思想を体系的に分析した力作である。</p> <p>サリムの思想や行動を、どのように分析すれば良いのか自体が難しいにもかかわらず、その難問を正面から取り上げ、歴史や文化を紐解きながら認識構造を読み解き、それを保健分野での政策を具体的に取り上げながら解明した点で大きな学問的意義がある。</p> <p>地域研究としての実証性や新しい知見という点ではやや新しさに欠けるかもしれないが、タイ政治研究に新しい研究の地平を開いたという点や、近代化の経路の比較の可能性を提示している点でも、注目に値する研究であり、佳作に値するすぐれた論文と評価できる。</p>
<p>ぐえん てい れ Nguyen Thi Le</p> <p>Childbirth among Ethnic Minority People in Northern Vietnam: Choice and Agency in the Hmong Case (北部ベトナム少数民族における出産—モン事例にみる選択と行為主体性—)</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; border-radius: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;">佳作</p>	<p>本研究の目的は、現代史の転換期にあるベトナム北部山地に居住する少数民族モン族の出産に関する実践を探り、彼らが一定の政治・社会的条件のもとで、いかにそしてなぜ、出産をめぐる数ある選択肢の中からある選択をするのかを解明することである。本研究の結果、多文化社会において、そして生物医学的・現代医療と民俗医療の交差する状況において、モン族が民俗医療システムと国民医療システムの双方から産科医療の選択肢を柔軟かつ実践的に取捨選択しながら融合的に利用していることがわかった。モン族が出産時に利用する医療形態は動態的であり、距離、コスト、医療の質、文化、社会的行為者の行為主体性など、多くの要素が複雑に影響し合っている。その中で、モン族はまた、すべての関連する要因のバランスを取り、母子の安全確保という究極の目的を確実に達成できるよう、出産における最善の選択をするための行為主体性を行使している。民族誌的調査により、モン族がいわゆる「文化的要因」や「構造的暴力」のみによって左右されるのではなく、出産時の意思決定に重要な行為主体性を有していることが示された。</p>	<p>調査許可取得が困難なベトナム山地少数民族地域に長期滞在調査し、モン族の近代医療へのアクセスや選択に関する問題に正面から取り組んだ研究。</p> <p>ステレオタイプな理解(民族学・開発学の両方から貼られたレッテル)を覆し、女性たちのエージェンシーと多様な選択を明らかにした。</p> <p>本論文はオリジナリティが高く、フィールドワークに基づく個々の主張には十分な説得力があり、さらに今後のベトナムにおける少数民族への保健行政のあり方に対する政策的示唆にも富んだ、優れた研究である。</p> <p>議論が平坦で大きな結論に至っていないという面がみられるものの、佳作に値するすぐれた論文と評価できる。</p>

## 第 22 回アジア太平洋研究賞



### 論文要旨

#### 現代中国の中央地方関係再考 ——集権と分権を架橋する広域統治機構の視角から

黄 喜佳

中華人民共和国では、党が国家を領導するという大前提のもとで、中央の方針を貫徹しながら地方を活性化させるために如何なる取り組みがなされてきたのか。中国共産党政権はこの問題に取り組むために、1949年の建国から1966年の文化大革命まで頻繁に制度を変更してきた。本論文が着目したのは、中央の下にある省という伝統的な行政区画を超え、いくつかの省を包摂した広域統治機構である。こうした機構は、様々な制度変更にもかかわらず一貫して存在し続けた。ところが、従来の中央地方関係の研究は、広域統治機構が持続した現象について、単に集権化と分権化に伴う付随的な結果に過ぎなかったとしてきた。

これに対して、本論文は、広域統治機構の実際の制度効果の内容、および広域統治機構が長期化し繰り返し出現した原因の解明という2つの課題を立てた。以上の課題に答えるために、各章では、具体的な広域統治機構、すなわち建国初期の大行政区体制、経済協作区、さらには1960年代の中央局の運営の実態について詳細な考察を行った。

結論では、中央は折衷的な政治状況を維持し、効果的な統治システムの運営を確保するために、広域統治機構を通じた統治方針を創出したことを指摘した。また、毛沢東時代の権力構造は高度に中央に傾斜していたのではなく、広域統治機構の存在を通して絶えず制度の調整が行われ、地方の協力を得ようとしていたという側面をも示した。

このように、現代中国の国家形成期において、中国は厳格な中央集権的な体制をとることはなく、広域統治機構の存在を通じて、制度的に地方を統合しながらその活力を保つことができたのである。このことは、改革開放時代に地方党委員会が活躍する基礎ともなったと考えられる。すなわち、以上の本論文で得られた知見は、従来の中央—地方という対立構図に対して再考を迫るのみならず、現代中国の中央地方関係にも新たな示唆を提供できると考える。

## *22nd Asia Pacific Research Prize*



### Abstract

#### Central-Local Relations in Contemporary China Revisited: From the Perspective of Regional Administrative Institutions Bridging Centralization and Decentralization

Hsi-chia Huang

What initiatives has the central government of the People's Republic of China implemented to solve the challenge of vitalizing local areas while continuing to pursue its own policies under the fundamental premise that the Communist Party of China rules and leads the nation? To address this challenge, the Chinese Communist government made frequent system changes from 1949, the year of the state's founding, to 1966, when the Cultural Revolution commenced. This dissertation focuses on regional administrative institutions each of which exercises jurisdiction over multiple provinces, going across borders between provinces as traditional administrative divisions under the rule of the central government. This kind of institution has survived various system changes throughout the history of communist China. However, previous studies on central-local relations have regarded the survival of these regional administrative institutions as a mere incidental result of a mixture of centralization and decentralization.

By contrast, this dissertation assigns two tasks to itself: revealing the details of the actual effects of the system of regional administrative institutions and identifying the causes of the long lasting and recurrent emergence of such institutions. To fulfill these tasks, each chapter is dedicated to in-depth consideration of specific regional administrative institutions, that is, greater administrative regions and economic cooperation regions, as well as the realities of the operation of the six Regional Party Bureaus (Northeast, North, Eastern, Middlesouth, Southwest, Northwest) in the 1960s.

The dissertation concludes that the central government developed a policy of administering the nation through regional administrative institutions to maintain the eclectic national political situation and ensure the operation of an effective administrative system. The conclusion also shows that the structure of power in the Mao Zedong era was not heavily centralized but, in a sense, relied on regional administrative institutions to constantly ensure coordination within the system and seek cooperation from local areas.

As mentioned above, during the period of the establishment of the modern Chinese state, the country succeeded in systematically unifying local areas and maintaining their vitality at the same time through regional administrative institutions, instead of adopting a rigorous centralized regime. This fact can be thought to have provided a foundation for local party committees to play an important role in the era of Reform and Opening-up. In other words, the findings of this dissertation will not only force a reconsideration of the conventional theoretical framework of central-local confrontation but also provide new suggestions for central-local relations in modern China.

## 第 22 回アジア太平洋研究賞 佳作



### 論文要旨

#### 病める王国—タイ王党派の物語りの政治—

クリッディコーン ウォンサワンパーニット

本論文は、タイ国民がなぜ何十年もの間、プーミポン国王の物語、つまり反進歩的な考え方に何の疑いも抱くことなく従ったのかを問うものである。この問いへの答えを求めると、プーミポン国王という存在の合理的構造や変容を把握するための概念的枠組みを突き止めた。この枠組みは、仏教の教えに基づいたものであり、医療従事者をはじめとする「ネットワーク君主制」によって語られたものだった。本論文は、医療従事者ネットワークという主体に焦点を合わせている。なぜならこのネットワークによる物語が、国民に「タイらしさ」や「サリム」の合理性を押し付け、これが文化的・制度的な盾となったからだ。

本論文では、プーミポン国王の物語と、時間の経過とともにその物語の演出や維持がどのように変化したかを検証する。ここでは、上座部仏教の2つの論理に基づきプーミポン国王の物語へと組み立てられた4つの主なストーリーを具体的に示した。4つの主なストーリーは次の通りである。お父さんから、お父さんのように(あれ)、お父さんのために、お父さんに替わって。いずれもプーミポン国王を国家の聖なる父として描いている。2つの仏教論理とは、チャオファ・モンクット(のちのラーマ4世)が創始したタマユット派とブッダダーサによる改訂上座部仏教である。

「お父さんから」というストーリーは、タマユット派と連携して、慈悲の象徴的存在として王を描き、国民は王に対し永遠の恩義があると感じさせるようにした。「お父さんのように(あれ)」というストーリーは、改訂上座部仏教と連携して、「無我の教義」を持つ優れた模範的人物として王を描き、国民に王の後に続くよう促した。これら2つのシナリオは、異なる2つの支配的かつ超保守的な合理性がタイに生まれる原因となった。つまり、人物崇拜とその支持者であるサリム原理主義者、そして教義崇拜とその支持者である進歩的サリムだ。

こうしたストーリーは、プーミポン国王の物語構造の基礎となっており、国民を支配し、民主主義の重要性を理解することさえ妨げた。そのため、タイの民主化は成功に至らなかった。この物語構造は、その支配的立場を反映した新しいストーリー、すなわち「お父さんのために」というストーリーを生み出すに至るまでにタイ社会を抑制していた。「お父さんのために」は、最初の2つのストーリーの成功が組み合わされたもので、プーミポン国王にタイ国家の物語の主役という地位を与えた。すべては、王のために行わなくてはならない。

この状況はタックシンとタイ愛国党(TRT)と未来前進党(FRP)が台頭し、様々な亀裂が生じるまで続いた。この亀裂は、反プーミポンの物語と、民主化への挑戦という新たな波を引き起こした。やがて保守陣営は、国王の逝去による喪失感を埋めるための新たなストーリーを企てなければならなくなった。

## 22nd Asia Pacific Research Prize : Commendation



### Abstract

#### Sick Kingdom: The Role and Politics of Thai Health Care in the Domination of Bhumibol's Narrative

Kritdikorn Wongswangpanich

The work asks why Thais blindly followed King Bhumibol's narrative, a counter-progressive reasoning, for decades. Answering this question led to conceptual frameworks to capture Bhumibol's rational structure and transformation, which was based on Buddhist teaching and narrated by the network monarchy, including the health service. The work focuses on one agency—the medical network—because its narrative imposed "Thainess" or "Salim" rationality on the people, which became its cultural and institutional shield.

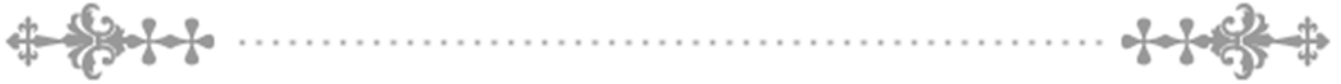
This dissertation examines Bhumibol's narrative and how time changes its production and preservation. The work realized the four main storylines which composed into Bhumibol's narrative that based themselves on two Theravada Buddhist logics. The four main storylines are: *From Dad*, *(Be) Like Dad*, *For Dad*, and *Replacing Dad*. All of them depicted King Bhumibol as the holy father of the nation. The 2 Buddhist logics are Dhammayuttika Nikaya which was devised by Chaofah Mongkut (later King Rama IV) and Revised Theravada Buddhism offered by Buddhadasa.

*From Dad* storyline worked with Dhammayuttika Nikaya to create the depiction of the king as the personification of benevolence and cause the citizens to feel forever indebted to the king. *(Be) Like Dad* storyline worked with the Revised Theravada Buddhism depicted the supreme role model of the "selflessness dogma" and urged people to follow the king's path. These two cases caused two different dominant ultra-conservative rationality in Thailand: the cult of persona and its followers, Salim Fundamentalist, and the cult of dogma and its followers, Progressive Salim.

These storylines and rationalities become the basis of King Bhumibol's narrative structure which dominated and constrained Thai citizens from acknowledging or even realizing the significance of democracy, and hence the lack of successful democratization. The narrative structure had reined Thai society to the point that it bred a new storyline reflecting its dominance, namely *For Dad* storyline. This is the storyline the combined the achievement of the first two storylines, granting King Bhumibol the status of the narrative owner of the Thai state. Everything conducted must be for the sake of the king.

This situation went on until cracks appeared that are the rise of Thaksin and Thai Rak Thai (TRT) and the rise of Future Forward Party (FFP). The cracks caused new waves of counter-Bhumibol's narrative and the attempts for democratization which eventually forced the conservative camp to brew a new storyline to replace the void left by the deceased king.

## 第22回アジア太平洋研究賞 佳作



### 論文要旨

#### 北部ベトナム少数民族における出産 ―モンの事例にみる選択と行為主体性

グエン ティ レ

本論文は、現代史の転換期にベトナム北部山岳地帯に居住する少数民族モン族の出産慣行について研究したものである。本研究では、モン族の人々への調査結果を踏まえ、この少数民族が特定の政治的・社会的状況において、出産に際していくつかの選択肢の中から、ある選択をするに至った経緯や理由を分析し、解明する。本研究は7章で構成されている。第1章では、本研究の背景、研究課題、文献レビュー、論理的枠組み、研究方法を説明する。第2章と第3章では、北部山岳地方の2つの村に居住する少数民族ならびにモン族の出産慣行に影響を与えているマクロな状況について述べる。民族性が議論の中心であるため、本研究はいわゆるいくつもの「少数民族」を形成している民族間関係のマクロな状況、ならびにこうした現状がもたらした結果に特に注目した。第3章は、ベトナムの少数民族のリプロダクティブ・ヘルスの問題に焦点を合わせ、一般的な論議から治療行為まで取り上げる。第4章では、モン族がその土地においてミクロな状況をどのように生きているかを探る。第5章は、モン族の伝統的な方法での出産について、民族誌学的研究に寄与した。第6章では医療システムが多元的に共存する状況において、2つの村のモン族の出産慣行がどのようなものであるかを調査する。そして、出産時の判断に関する統計的分析と女性たちの話をもとに、出産慣行の実態ならびに女性たちの選択に影響する様々なファクターを明らかにしている。第7章は、すべての章のデータと分析をもとに、議論と結論を提示する。この章では、理論的枠組みと調査結果に基づき、出産慣行を選択するプロセスにおける地元住民の主体性を明らかにし、民族性と近代化プロジェクトに関連する問題ならびに、ベトナムにおける少数民族の出産とリプロダクティブ・ヘルスに関する研究の意味を議論する。

本研究の結果、生物医学的/現代医療と民族医療が相互に影響を及ぼす状況において、調査を行った2つの村のモン族の人々は、民族の医療制度と国の医療制度の両方から産科医療の選択肢を柔軟かつ実践的に、取捨選択しながら融合したやり方で活用しているということが分かった。モン族の女性たちが出産時に使用する医療に対する行動パターンは絶えず変化し、さまざまな要素、例えば、距離、費用、ケアの質、文化、社会的当事者の主体性などの複雑な相互作用を映し出している。モン族は、すべての関連する要因のバランスをとり、究極の目標である母子の安全を確保するために、出産時に最善の選択ができるよう主体性を行使する。民族誌学的研究により、モン族はいわゆる「文化的要因」や「構造的暴力」によって全てが決定されるわけではなく、出産時の意思決定に重要な主体性を持っているということが分かった。

## *22nd Asia Pacific Research Prize : Commendation*



### Abstract

#### Childbirth among Ethnic Minority People in Northern Vietnam: Choice and Agency in the Hmong Case

Nguyen Thi Le

This dissertation is a study of the birth practices among Hmong minorities in the mountains of northern Vietnam in a period of transition in modern history. Taking into account the voices of the local population, this study examines and interprets how and why the Hmong minorities make a choice between alternatives during childbirth in specific political and social climates. The research is represented in 7 chapters. Chapter 1 provides the background of the study, research questions, literature review, theoretical framework, and research methodology. Chapters 2 and 3 describe the macro contexts that influence the birth practices of the ethnic minorities and the Hmong in the two northern mountain villages. Since ethnicity is the focus of the argument, this study pays special attention to the macro-contexts of ethnic relationships that formulate the so-called "ethnic minorities" and the consequences of such a status quo. Chapter 3 focuses on reproductive health problems among ethnic minorities in Vietnam, from the common discourses to the interventions. Chapter 4 explores how the Hmong live as a micro-context on the ground. Chapter 5 contributes to an ethnography of birth in the Hmong traditional way, and Chapter 6 investigates childbirth practices among the Hmong in two villages in the context of medical pluralism. Statistical analyses and women's statements on birth decisions are used to provide the real picture of childbirth practices and the factors that influence those choices. Chapter 7 presents discussions and conclusions based on data and analysis of all chapters. Drawing from the theoretical framework and research findings, this chapter clarifies the local population's agency in the process of choosing birth practices and discusses issues related to ethnicity and civilizing projects, as well as the implication of the study on childbirth and reproductive health among ethnic minorities in Vietnam.

The results of this study show that in the context of the interaction between biomedical/modern care and ethnomedical care, Hmong people in the two studied villages have utilized obstetric care options from both the ethnomedical system and the national health care system in a flexible, pragmatic, eclectic and syncretic way. The healthcare patterns used by Hmong women during childbirth are dynamic, reflecting the complex interaction of many factors, such as distance, cost, quality of care, culture, and the agency of social actors. The Hmong exercise agency to make their best choices in childbirth which can balance all relevant factors and ensure the ultimate goal: the safety of mother and child. Ethnography can show that the Hmong are not completely determined by the so-called "cultural factor" or by "structural violence", but have significant agency in decision-making during childbirth.





アジア太平洋フォーラム・淡路会議

**Asia Pacific Forum, Awaji Conference Japan**

無断転載禁止／All rights reserved